

# 令和6年産 特別栽培米つや姫栽培ごよみ(平坦部用:300m以下)

月	4月					5月					6月					7月					8月					9月																													
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25																									
生育段階・区分	育					苗					活着					有効分けつ					無効分けつ					幼穂形成					穂ばらみ					登					熟														
水管理																																																							
技術内容	<p>深耕</p> <p>・耕起作業は、均平が図れるよう丁寧に</p>					<p>◎健康な苗づくりを！（苗半作！）</p> <p>・薄まきの励行（乾籾一〇g（箱）程度）</p> <p>・硬化期は温度管理に注意しながら</p> <p>・できるだけ外気温にならして健苗育成</p>					<p>◎基肥は控えめに！</p> <p>・有機物多用田では減肥</p>					<p>◎植え付けは適正に！</p> <p>・坪付は八〇株</p> <p>・株間は一八〇cm</p> <p>・一株植付け本数 三〜四本</p>					<p>◎水管理の徹底！</p> <p>・中干しの実施</p> <p>・作溝の実施</p> <p>・体系処理による効果的除草</p>					<p>◎中間追肥の施用</p> <p>（粒状肥料体系・ペースト肥料体系）</p> <p>・中干し開始一六〜二〇本/株</p>					<p>◎穂肥は適期に適量を！</p> <p>・基準量を超過しない</p> <p>・出穂前二五日・幼穂長約1mm</p>					<p>◎カメムシ防除の徹底！</p> <p>・仕上げは万全に！</p> <p>◎穂いもち防除</p> <p>・低温の時は深水管理</p>					<p>◎網目一・九〇使用厳守！</p> <p>・適期刈り取り</p> <p>・適正な乾燥へ急激な乾燥は避けゆっくりと</p> <p>◎青味籾率一〇〜一五%</p>					<p>◎出穂後三〇日程度は間断かん水</p> <p>・適期落水に努め早期落水はしない！</p>					<p>（稲わら腐熟・土づくり肥料・堆肥等）</p> <p>土づくりの実施</p>				
生育段階・区分	播種					田植え					有効分けつ決定期					穂首分化期					最高分けつ期					類花分化期					減数分裂期					出穂期					成熟期														
技術内容	<p>出穂期が8月上旬～中旬となるように播種・田植えを実施する。</p>																																																						
病害虫防除																																																							

## ◆栽培での注意事項

栽培資格 栽培要件	JASの定める特別栽培米基準に基づき、適切な栽培管理を実施し栽培の記録を行う。
栽培目標	土づくりを基本とし、健苗育成、適正防除・施肥・水管理等を徹底する。また、収量を第一とせず、品質(整粒歩合)・食味の向上に重点を置く。
土づくり	稲わらを腐熟させるために秋起こしを実施する。地力増進を図るため完熟堆肥等を施用し、品質、食味向上、収量改善のため、土づくり肥料(推奨品目:田んぼの守60kg/10a)を施用し、稲体の健全化を図る。また、深耕は15〜18cmを目安とする。
施肥	肥料は暦に基づき有機態窒素入り肥料を施用し、施肥量は化学肥料の窒素成分で10a当り4.0kg以下(慣行栽培の5割以下)とする。
育苗・田植	特別栽培米の種籾は、無消毒種子の温湯消毒種子または、微生物農薬による消毒種子を用いる。健苗育成を行うため薄播き(乾籾120g程度)とし、1株当り3〜4本植えとする。出穂期の高温・登熟障害対策として、出穂の目安を8月上旬～中旬におき、播種は5月1日以降、田植時期は5月下旬となるよう育苗を行う。
水管理	過繁茂を防止し稲体の健全化を促すため、間断灌水や中干し等、基本管理を徹底する。また、品質向上(整粒歩合)を図るため出穂後30日頃まで間断灌水を行い、早期の完全落水をしない。
病害虫防除	畦畔の草刈り等を徹底し、病害虫防除に努める。農薬を使用する場合は、種子消毒、防除剤を含め、栽培暦に基づき農薬を使用する。なお、指定農薬以外の農薬防除が必要な状況が生じた場合は、関係者が協議し、追加防除を行った圃場の米は慣行栽培米の扱いとする。

## ◆施肥基準(10a当り)

### 粒状肥料体系

「 」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥 -25日	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
完熟堆肥	1000						
田んぼの守	60				1.8	1.8	2.6
優作	20			2.0 「0.98」	2.0	2.0	
ホスピタ(※2)		20			1.0		2.3
けい酸加里 プレミア34(※3)		20				4.0	0.8
優作(※1)			25	2.5 「1.23」	2.5	2.5	
合計				4.5 「2.21」	7.3	10.3	5.7

### ペースト肥料体系

「 」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥 -25日	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
完熟堆肥	1000						
田んぼの守	60				1.8	1.8	2.6
プレーパーペースト 734		35		2.45 「1.23」	1.1	1.4	
ホスピタ(※2)		20			1.0		2.3
けい酸加里 プレミア34(※3)		20				4.0	0.8
優作(※1)			20	2.0 「0.98」	2.0	2.0	
合計				4.45 「2.21」	5.9	9.2	5.7

### 一発肥料体系

「 」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	成分量(kg)			
			窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量					
完熟堆肥	1000					
田んぼの守	60			1.8	1.8	2.6
ホスピタ(※2)	40			2.0		4.6
けい酸加里 プレミア34(※3)	40				8.0	1.6
新つや姫用一発 肥料(※4)	36		4.3 「2.15」	2.2	2.2	
合計			4.3 「2.15」	6.0	12.0	8.8

## ◆農薬使用基準(成分回数8回以内)

注1)〇内の数字は成分回数を表します。  
注2)農薬使用基準を正しく守りましょう。

種子消毒剤	特別栽培米の種籾は、無消毒種子を用い温湯種子消毒または、微生物農薬種子を使用									
育苗箱施薬	稲名人箱粒剤②									
除草剤	<table border="1"> <tr> <th>体系</th> <th>初期</th> <th>中後期</th> </tr> <tr> <td>初期</td> <td>ビクトリーZジャンボ②または、ビクトリーZ1キロ粒剤②または、ビクトリーZ400FG②</td> <td>※いずれかを選択</td> </tr> <tr> <td>中後期</td> <td>アトリ1キロ粒剤①またはアトリ豆つぶ①</td> <td>※どちらかを選択</td> </tr> </table>	体系	初期	中後期	初期	ビクトリーZジャンボ②または、ビクトリーZ1キロ粒剤②または、ビクトリーZ400FG②	※いずれかを選択	中後期	アトリ1キロ粒剤①またはアトリ豆つぶ①	※どちらかを選択
	体系	初期	中後期							
初期	ビクトリーZジャンボ②または、ビクトリーZ1キロ粒剤②または、ビクトリーZ400FG②	※いずれかを選択								
中後期	アトリ1キロ粒剤①またはアトリ豆つぶ①	※どちらかを選択								
本田防除	<p>【出穂前】 〈いもち病・紋枯病・カメムシ類〉 アミスターレボンSE② ※どちらかを選択 レボン粉剤DL①</p> <p>【出穂後】 〈カメムシ・ウンカ類〉 スタークル液剤10①又は、スタークル粉剤DL① ※どちらかを選択</p>									

注※1:穂肥(優作)は、出穂25日前頃に葉色、茎数を確認し施用する。(窒素施肥量で2〜3kg)  
注※2:食味向上に向け基肥または中間追肥としてホスピタを20kg〜40kg散布を行う。(圃場条件等により施用、無施用を判断する。)  
注※3:けい酸加里プレミア34は、粒状・ペースト肥料体系は田植え後30〜35日頃に施用、一発肥料体系は基肥施用する。  
注※4:新つや姫用一発肥料は、初期の肥効が緩やかなため、山間地域等の初期の分けつが確保しにくい水田では、極端な疎植をしない。

# 令和6年産 特別栽培米つや栽培ごよみ(山間部用:300m以上)

月	4月					5月					6月					7月					8月					9月																								
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25																				
日	育苗					活着					有効分けつ					無効分けつ					幼穂形成					穂ばらみ					登					熟														
生育段階・区分	播種					田植え										有効分けつ決定期					穂首分化期					最高分けつ期					類花分化期					減数分裂期					出穂期					成熟期				
水管理																																																		
技術内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎健康な苗づくりを！(苗半作！)</li> <li>・深耕(均平が図れるように丁寧に)</li> <li>・薄まきの励行(乾粒一〇g(箱)程度)</li> <li>・硬化期は温度管理に注意しながら</li> <li>・できるだけ外気温にならして健苗育成</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>◎水管理の徹底！</li> <li>・体系処理による効果的除草</li> <li>・(坪六〇株を目安に)</li> <li>・植付株間は一八〜二二cm</li> <li>・一株植付け本数 四〜五本</li> <li>◎植え付けは適正に！</li> <li>・有機物多用田では減肥</li> <li>◎基肥は控えめに！</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>◎中間追肥の施用</li> <li>・(粒状肥料体系・ペースト肥料体系)</li> <li>・(中干し開始一六〜二〇本/株)</li> <li>・中干しの実施</li> <li>・作溝の実施</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>◎出穂前二五日・幼穂長約1mm</li> <li>・穂肥は適期に適量を！</li> <li>・基準量を超過しない</li> <li>◎一発施肥の場合、幼穂形成期頃に葉色が淡くなる場合は、追肥を行う(葉色板で3.5以下)(窒素量で1kg)</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>◎カメムシ防除の徹底！</li> <li>・仕上げは万全に！</li> <li>◎穂いもち防除</li> <li>◎低温の時は深水管理</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>◎網目一・九〇使用厳守！</li> <li>・選別流量を適正に！</li> <li>・水分一四・〇〜一五・〇%</li> <li>◎適正な乾燥(急激な乾燥は避けゆっくりと)</li> <li>・青味籾率一〇〜一五%</li> <li>◎適期刈り取り</li> <li>・適期落水に努め早期落水はしない！</li> <li>◎出穂後三〇日程度は間断かん水</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>◎稲わら腐熟・土づくり肥料・堆肥等)</li> <li>・土づくりの実施</li> </ul>																			

## ◆栽培での注意事項

栽培資格 栽培要件	JALまねの定める特別栽培米基準に基づき、適切な栽培管理を実施し栽培の記録を行う。
栽培目標	土づくりを基本とし、健苗育成、適正防除・施肥・水管理等を徹底する。また、収量を第一とせず、品質(整粒歩合)・食味の向上に重点を置く。
土づくり	稲わらを腐熟させるために秋起こしを実施する。地力増進を図るため完熟堆肥等を施用し、品質、食味向上、収量改善のため、土づくり肥料(推奨品目:田んぼの守60kg/10a)を施用し、稲体の健全化を図る。また、深耕は15~18cmを目安とする。
施肥	肥料は曆に基づき有機態窒素入り肥料を施用し、施肥量は化学肥料の窒素成分で10a当り4.0kg以下(慣行栽培の5割以下)とする。
育苗・田植	特別栽培米の種籾は、無消毒種子の温湯消毒種子または、微生物農薬による消毒種子を用いる。健苗育成を行うため薄播き(乾粒120g程度)とし、1株当り4~5本植えとする。 茎数並びに収量確保のため、また登熟向上を図るため田植え時期を5月上旬から中旬とする。
水管理	過繁茂を防止し稲体の健全化を促すため、間断灌水や中干し等、基本管理を徹底する。また、品質向上(整粒歩合)を図るため出穂後30日頃まで間断灌水を行い、早期の完全落水をしない。
病害虫防除	畦畔の草刈り等を徹底し、病害虫防除に努める。農薬を使用する場合は、種子消毒、防除剤を含め、栽培暦に基づき薬剤を使用する。なお、指定薬剤以外の薬剤防除が必要な状況が生じた場合は、関係者が協議し、追加防除を行った圃場の米は慣行栽培米の扱いとする。

## ◆施肥基準(10a当り)

### 粒状肥料体系

「 」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥 -25日	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
完熟堆肥	1000						
田んぼの守	60				1.8	1.8	2.6
優作	25			2.5 「1.23」	2.5	2.5	
ホスピタ(※2)		20			1.0		2.3
けい酸加里 プレミア34(※3)		20				4.0	0.8
優作(※1)			25	2.5 「1.23」	2.5	2.5	
合計				5.0 「2.45」	7.8	10.8	5.7

### ペースト肥料体系

「 」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	穂肥 -25日	成分量(kg)			
				窒素	リン酸	加里	苦土
生わら	全量						
完熟堆肥	1000						
田んぼの守	60				1.8	1.8	2.6
プレーパーペースト 734		35		2.45 「1.23」	1.1	1.4	
ホスピタ(※2)		20			1.0		2.3
けい酸加里 プレミア34(※3)		20				4.0	0.8
優作(※1)			25	2.5 「1.23」	2.5	2.5	
合計				4.95 「2.46」	6.4	9.7	5.7

### 一発肥料体系

「 」内は、化学肥料由来の窒素量

肥料名	基肥	追肥	成分量(kg)				
			窒素	リン酸	加里	苦土	
生わら	全量						
完熟堆肥	1000						
田んぼの守	60			1.8	1.8	2.6	
ホスピタ(※2)		40		2.0		4.6	
けい酸加里 プレミア34(※3)		40			8.0	1.6	
新つや姫用一発 肥料(※4)		40		4.8 「2.4」	2.4	2.4	
合計				4.8 「2.4」	6.2	12.2	8.8

## ◆農薬使用基準(成分回数8回以内)

注1)〇内の数字は成分回数を表します。  
注2)農薬使用基準を正しく守りましょう。

種子消毒剤	特別栽培米の種籾は、無消毒種子を用い温湯種子消毒または、微生物農薬種子を使用	
育苗箱施薬	稲名人箱粒剤②	
除草剤	体系 初中期	ビクトリーZジャンボ②または、 ビクトリーZ1キロ粒剤②または、 ビクトリーZ400FG② ※いずれかを選択
	中後期	アトリー1キロ粒剤①または アトリー豆つぶ① ※どちらかを選択
本田防除	【出穂前】	(いもち病・紋枯病・カメムシ類) アミスタートレボンSE② トレボン粉剤DL① ※どちらかを選択
	【出穂後】	(カメムシ・ウンカ類) スタークル液剤10①又は、スタークル粉剤DL① ※どちらかを選択

注 ※1:穂肥(優作)は、出穂25日前頃に葉色、茎数を確認し施用する。(窒素施肥量で2~3kg)  
意 ※2:食味向上に向け基肥または中間追肥としてホスピタを20kg~40kg散布を行う。(圃場条件等により施用、無施用を判断する。)  
事 ※3:けい酸加里プレミア34は、粒状・ペースト肥料体系は田植え後30~35日頃に施用、一発肥料体系は基肥施用する。  
項 ※4:新つや姫用一発肥料は、初期の肥効が緩やかなため、山間地域等の初期の分けつが確保しにくい水田では、極端な疎植をしない。